

厚生労働省が公表した2023年の人口動態統計によると、1人の女性が産む子どもの数の指標となる合計特殊出生率は1.20であり、統計を取り始めて以降最低を更新したことは記憶に新しい。この少子化問題の背景として未婚化や晩婚化が取り上げられ、若者の恋愛に対する姿勢にも注目が集まり、「若者の恋愛離れ」などという見出しのニュースもよく見かける。しかし現実の若者は恋愛コンテンツに関心を持ち、カップルで活動するインフルエンサーも人気を集めている。そのため若者は「恋愛離れ」を選択するのではなく、恋愛に変化を求めているようにも思える。こうした若者の恋愛観をより深く理解しようとする際の助けとなるのが本書である。

本書は、首都圏在住・高学歴・正規雇用者・異性愛者にみえるような限定性のある若者にインタビュー形式で調査を行う。そして恋愛の概念に含まれるとされるロマンティック・ラブ・イデオロギーの「愛一性一結婚」の要素を一つずつ解体し、その一つひとつと恋愛との関連を若者がどのように認識しているのかを、コミュニケーションのあり様に着目しつつ考察することを目的としている。

本書は、序章と終章を含むと全7章で構成される。序章では若者の恋愛問題の背景を深掘りし、本研究での問いが「愛一性一結婚」の各要素に関連して三つ設定されている。またキー概念となる「結婚」や「性」、「恋愛」という用語についての定義を行い、本書の立場を提示している。

第1章は4節で構成されており、戦後日本社会における「愛一性一結婚」の変遷やそれに伴う恋愛研究の展開などをまとめた上で、若者たちの「恋愛」の意味づけを探る本書の姿勢を提示し、続く第2章で調査法とその対象、データ分析の手続きが解説される。

第3章では「付き合う」までの過程と「別れ」の局面で営まれるコミュニケーションに焦点を当てて論じられている。「付き合う」前にお試し期間を設け、結婚できる人かを見極めた上で交際をはじめめるケースや、現在の交際を続けるべきかどうかを判断する際にも、他に乗り換えることも選択肢としては存在している。しかし、それ自体が選択ミスになる可能性もあるため、本書の調査では慎重に交際相手を見極める様子が見いだされた。つまり自身が「リスク」の責任を負うことを避けるため、互いに責任を押し付け合っているというのであり、恋愛という人間関係の構築において、合理性を追求するメンタリティがこれを支えているとの指摘は注目されよう。

第4章ではこれまで恋愛と密接な関係があると思われていた性行動を、どのように認識し意味づけているのかに着目する。男性調査対象者たちの語りでは、男女関係における性行動の責任は男性に重く課せられるため、これを軽減させるためにも性的な関係を避ける傾向があり、一方でこうした男性の思考に対して女性調査対象者たちは困惑する。この背景にはカップルという関係では、男性から女性に対して性的関係を求めてくるべきであるという根強い期待や規範意識があると著者は考察を加えるのであるが、同時に性行動には個人差があり、相手の価値観などを予想しつつ、これに適合させる形で行動していることも明らかにする。

第5章では、若者たちの恋愛と結婚の関係が取り上げられる。本書では①若い頃の恋愛感情のみをベースとした「恋愛」から、②20代半ばを過ぎてからの結婚条件のみを強く意識した「恋愛」へと移行する様を描く事に成功している。若者たちはライフステージに伴って「恋愛」と「結婚」の意味づけが書き換えるのである。

そして終章においては、これまでの議論をまとめる形で現代社会における「恋愛したら結婚」という統制の絶対性が消失したことを受け、規範から行為への一方的な影響関係のみで若者の恋愛の様相を説明することはできなくなったことが強調されるのである。

本書の調査対象は社会構造的に制約が少なく、高学歴・正規雇用者・異性愛者である若者たちが取り上げられる。しかし一方で2006年のモントリオール宣言や2015年の東京都渋谷区や世田谷区で採用された「パートナーシップ制度」などを通じて、LGBTQやLGBTQ+といった視点が広がりつつある現状も無視できない。もちろん著者自身もこうした点に自覚的ではあるが、ここでは恋愛＝異性という図式は成立せず、同性愛などの存在が浮上ってくる。異性愛と同様に性を同じくする者同士の「恋愛」や「結婚」、あるいは「付き合う」といった行為からは、現代日本の若者の恋愛に関して本書とは別の側面が見えてくるのかもしれない。調査対象を広げた著者の今後の研究に期待したい。